

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言を仮名で書く：琉球宮古語池間方言を例に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2021-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003446">https://doi.org/10.15084/00003446</a>

## 方言を仮名で書く—琉球宮古語池間方言を例に

田窪行則

### 1. はじめに

本稿では口頭語として存在している方言で書くことの難しさ、特に琉球の諸言語のように、書きことばである日本語共通語との距離が大きい場合の難しさを、琉球宮古語池間方言の正書法と書きことばの作成過程に即して論じる<sup>1</sup>。

### 2. 琉球諸語の文字使用

琉球王府の使用していた文字としては漢文、日本語の候文が用いられていたが、琉球の方言を書き起こす手段として体系的に用いられては来なかったとみてよい。沖縄首里のことば以外は琉球諸語は文字を持たず、書きことばとしては存在していなかったことを意味する。一部歌謡は書かれていた可能性はあるがそれがどのような形で書かれていたかの体系的な研究は多くない。

琉球諸語の研究は古くから言語学者が行ってきているが、彼らは言語の記述をその目的としており、それらの言語を母語話者が使えるように工夫して正書法を作るという試みは最近まではしてこなかったと言ってよい<sup>2</sup>。2009年にUNESCOのAtlas of World Languages in Dangerが発表されてから、琉球諸語が日本語とは異なる「言語」、それも消滅の危機にある言語であるという認識が母語話者広まり、単に言語記述だけにとどまらず、言語の維持・再生に言語学者が取り組むようになって初めて、使いやすい文字、正書法の作成が問題になってきた。

### 3. 池間方言について

宮古語池間方言は、琉球諸語宮古語に属する方言で現在池間島、伊良部島佐良浜地区、宮古島西原地区で話されている。この3つの変種は多少の語彙やイントネーションの違いはあるが、ほぼ完全に相互理解が可能である。他の琉球諸方言と同じく危機言語であり、母語話者は60代以上と想定されていた(林 2013)。実際には理解できる話者はもっと多いと考えられ、2018年3月現在の筆者たちの調査では、30代後半であれば内容についてはほとんど理解でき、人によっては話すこともできると考えられる(田窪 2018、Yamada et al.(印刷中))。

---

<sup>1</sup> 本稿は大学1年生程度の音声学、音韻論の概論的知識を前提とする。実際の文字やその発音の説明と例に関しては、筆者たちの作成したデジタル博物館 (URL: <http://kikigengo.jp/nishihara/doku.php?id=start>)、特に「学習室—日常のことば—発音と文字表記 (URL: <http://kikigengo.jp/nishihara/doku.php?id=study:sketch:pronunciation:consonants>) を参照されたい。

<sup>2</sup> 最近の試みとしては小川編 2015 がある。

しかし、これらの若い世代が家庭で子供に向かって池間方言で話すことはなされておらず、家庭内での言語継承はすでに断絶しているとみなされる。

池間方言は琉球宮古語に属する言語であるが、他の琉球諸語とは相互理解度は低く、特に北琉球諸語とはまったく意思疎通が不可能である（田窪 2018、Yamada et al.印刷中）。また、南琉球八重山語、与那国語とも意思疎通はできないと考えられる<sup>3</sup>。さらに、池間方言は周辺の宮古方言とも相互理解度はあまり高くない<sup>4</sup>。これは池間方言が他の宮古島の諸方言よりも早く宮古語から分岐し、しかも池間島という島で話されていたという理由による。

#### 4. 池間方言を書く

池間方言はそれを母語として日常的に使用している世代にとってもあくまでも口頭言語であり、書記言語として使用する場面は限られる。もし、文字で池間方言を書き記す場合はひらがなや漢字が使われる。筆者たちが 2006 年 1 月以来調査している池間方言は宮古島の西原地区で話されている変種である<sup>5</sup>。

この地区では以前は古謡を話者が記憶しており、なにも見ずに歌うことができたが、ある世代から歌詞を紙に書いてそれを見ながら歌うことが行われている<sup>6</sup>。西原は琉球王府の命令で、池間島から宮古島の西原地区に強制移住させられた人たちによって 1874 年に作られた集落である。1975 年に 100 周年を記念して西原民謡集（創立百周年記念期成会民謡保存部（1975））が作られており、それは漢字仮名交じり文に一部漢字にルビを付して書かれている。

これらの歌詞に使われる仮名は共通語の文字を用いて自分の母語を記すわけで、当然音素体系が異なる方言を記すのには不十分である。池間方言には共通語にはない音素の対立があり、それらは仮名では十分には表記されない。もちろん、母語話者がもとの方言の形を思い出すためのメモとしてはそれで十分なわけであるが、すでにこの方言の母語話者ではなくなっている子供たちが方言劇の練習をするのに使うものとしては不十分なものとなる。池間方言の音韻を正確に写す表記法が必要になるわけである。

---

<sup>3</sup> 筆者が八重山語宮古方言の母語話者 2 名に対して行ったパイロットテストでは、池間方言の 1 分 20 秒ほどの物語に対する理解度（20 の質問）は 1 人が 50%前後、今一人が 15%程度であった。このうちの 1 人は沖縄文学の修士号を持っており、琉球諸語の専門家に近い人だったため 50%程度の理解度があったのだと考えられる。一般の人であれば 15%前後しか理解できないのではないかと思われる。

<sup>4</sup> 新城方言の話者に対して行ったパイロットテストでは、30%前後であった。文脈がなければ話がわからないレベルである。

<sup>5</sup> 我々の調査に関しては田窪 2011a を見られたい。

<sup>6</sup> 筆者たちの 2006 年 12 月 26 日での調査では、84 歳の女性はコピーした歌詞を読み、9 歳の女性は何も見ないで古謡を歌っていた。その後の調査でも 2006 年現在で 90 以上の話者はほぼ歌詞を暗記していた。これは識字の問題ではないことを確認してある。

100周年記念の冊子は漢字仮名交じり文で書かれている。当時の話者たちにとって読むのにさほどの問題はなかったかもしれないが、現在の話者にはすでにその漢字がどのように読まれていたのかが不明な場合が多くある。「西原民謡集」では多くの漢字にルビを振っているのだが、いわゆるやさしい漢字にはルビが振られていない。これは当時の話者には自明であったからであるが、編纂から40年以上たった現在、多くの話者にはいくつかの漢字の方言音が不明になってしまっている。たとえば長女を意味する「大姉」にはルビがない。これはルビが振られていれば「はあに [ha:ni]」となるかと思われるが、方言をよく知らない若い話者には読めなくなっている可能性も生じる。

筆者は西原地区の調査成果を地区の人々に還元することを目的に、方言による絵本作りをするためや動画に書き起こし字幕を付けるため、正書法を作った<sup>7</sup>。以下ではその時の方針を記して、他の危機方言への正書法を作成する場合の参考となるようにしたい。

#### 4-1 正書法をつくる

正書法は母語話者だけでなく、共通語が母語で、池間方言が母語でなくなっている若年層の話者をも対象としている。したがって、この方言の正書法を作成するためには共通語の正書法からの干渉も勘案してわかりやすいものを作る必要がある。

池間方言では母音は/a, i, u, i/が区別される。他の宮古語の他の方言に比べて、池間方言は音韻的に単純でいわゆる舌尖母音はなく、環境によって単なる中舌母音/i/や/i/に変化している。

共通語と異なり、/t/は/u/と結合するときに破擦音[tsu]とならず、[tu]と発音される。この音は琉球諸語と共通語との違いがよく知られており、話者たちが使う表記でも通常「とう」と表記されている。池間方言には、/tsi/も存在する。これは「つ」で表記できる。「つ」の有声音は、「ず」と表記するか、「づ」と表記するかの二つの可能性がある。/i/は/s, ts, dz/のみと結合する<sup>8</sup>。[dzi]と[zi]の対立はこの方言には存在せず、/tsi/の有声音は「づ」、「ず」のどちらを用いても構わない。形態音韻論的には「ず」と「づ」は区別したほうがよいが、[z]と[dz]で区別される最小対は存在しないため、音素的には区別されない。したがって、文字としては形態音韻論的な表記を採用するか、音素的な表記を採用するかによって、「づ」、「ず」のどちらを採用するかが決められる。現在は、音素的表記を採用しているため、「ず」が用いられる。「ち」と「じ」に関しても同様の理由で、「じ」を採用した。

また、/si/と/su/は対立する。/si/は「す」と表せる。「すい」と書く人もいるが、英語のsingのsiのように発音してしまいたくなるので採用しない。/su/に対しては多くの母語話者は

---

<sup>7</sup> もともとは2011年3月に読み聞かせ用の紙芝居として刊行された。花城(2013a,b)として田窪編(2013)に採録されている。田窪による簡単な表記法の説明も採録されている。

<sup>8</sup> /tsu/と/dzu/がこの方言には存在せず、/tsi/と/dzi/と区別して、「つう」とか「づう」とかの表記は必要ない。

「すう」を採用しているが、我々の正書法では「そう」という表記を採用している。これはすでに広く使われている「とう」との並行性と、「す」との区別のしやすさを考慮したものである<sup>9</sup>。動画の字幕では一瞬で消えてしまうので、「すう」では「す」を区別しにくいからである。

この方言ではすべての子音阻害音の前に、[n]、[m]、[ŋ]が先行する。[nta]（土）、[mba]（いやだ）、[ŋkya:n]（昔）のごとくである。この鼻音は互いに対立しないので、「ん」としてよい。他の宮古方言では、語末の[m]と[n]は対立するので表記に工夫をする必要があるが、池間方言ではすでに70代以下の話者で対立がなくなっているため、語末の鼻音にも「ん」を使ってよい。したがって、「土」は「んた」、「いやだ」は「んば」、「昔」は「んきやーん」となる。

この鼻音は/m/、/n/とも結びつき、二重子音[mm]、[nn]となる。この場合も、[m]、[n]は対立していないので、「ん」で表してよい。[mma]は「んま（母親）」、[nna]は「んな（巻貝）」と表記する。「ん」は長音化してもよく、「んー（芋）」となる。この場合、発音は[n:]、[n:]、[m:]のどれでもよく、[ŋ:]でもよい。

この方言には無声の鼻音が存在し、鼻音の前にのみ現れる。[ŋnu]、[ŋmu]のごとくである。これは「ん°」のように表記する。そこで、[ŋnu]は「ん°ぬ（昨日）」、[ŋmu]は「ん°む（雲）」のように表記する。

また、この方言には鼻音以外にも阻害音にもすべて二重子音がある。これらは促音「っ」を前につけて表す。/tta/「った（舌）」、/ssa/「っさん（虱）」、/ffa/「っふあ（子供）」のようになる。[v]は二重子音としてしか存在しない。/vva/は「っうあ」と表記される。

この方言にはfが存在し、[fu]が[hu]と対立する。[fu]は「ふ」、[hu]は「ほう」と表記する。

長音は共通語ではさまざまな表記法があるが、この方言の正書法は音素レベルのものを採用したため、表記法としては長音記号「ー」を採用した。

#### 4-2 母語話者による池間方言の表記の例

書きことばとして存在していない言語は当然正書法を持たない。そのためその表記にはかなりの揺れが見られることになる。西原地区での仮名表記の例としては先述の100周年記念の歌謡集があるが、これはかなり昔の池間方言を写したものであるため、あまり参考にならない。西原地区での書きことばとしての利用は断片的なものであるため、すでにかんりの長さの表記例がある池間島の池間方言について具体的に見てみよう。

池間島で話されている池間方言に関しては、伊計他（2005）、上里他（2008）の2冊の本が、池間方言とその共通語訳という形で書かれている。前者は池間島のカツオ漁、後者はミ

---

<sup>9</sup> tu は語源的に to が音韻変化したものであるが、これと並行して su も so が音韻変化したものである。

ヤークズツという祭祀について、実話、インタビュー、創作を交えてつづられた物語で 280 ページあまりある非常に興味深いものである。

どちらの本も用いている表記に対する説明はない。表記方法そのものには工夫がなされており、分かち書きをして、語幹と接辞の間には「・」を入れて表記をしている。しかし、複数の著者により書かれているためか、表記の揺れがかなりある。

4.1 で述べたように、/su/と/si/は音韻的に対立する。両書では/su/は「すう」、/si/は「す」と書き分けられている。「けれど」にあたる接辞/suga/はこの方式に従えば「すうが」と書かれるべきであるが、多くの例で「すが」と「すうが」が混在する。話者によって、/su/と/si/の区別がなくなったとは考えにくいいため、これは表記の揺れであると考えられる。

4.1 で述べたように、この方言では/hu/と/fu/が対立する。たとえば、前者は「ほう」、後者は「ふ」などと書き分けるべきである。「している」に当たる表現は/hii ui/が音韻変化して/hu:/となる。「来る」に当たることばは/fu:/であるため、両者は最小対をなし、表記上でも区別されるべきである。しかし、「来る」の表記は、「ふー」などでほぼ一貫しているが、「している」は「ほうー」、「ふうー」、「ふー」などが混在する<sup>10</sup>。これらの二つの単語の形式がこの本の著者たちの世代で区別されていることは、「ほうー」の形が存在すること、「ふー」でなく「ふうー」として書き分けている例があることからわかる。

すべての対立する音素が意識して区別されているわけではない。4.1 で述べた「昨日」に当たる単語は[ɲnu]、「雲」に当たる単語は[ɲmu]となるはずであるが、どちらの本でも区別されておらず、それぞれ「んぬ」、「んむ」と表記されている。我々が 2006 年に池間島で調査した際には、この二つの音素は区別されていたのでおそらくは表記として区別されていないだけと思われる。

これらの例は正書法が確定していないことから来るとと思われる。

#### 4-3 書きことばを作る

正書法以外にも方言を書くために解決しなければいけない問題は多く存在する。話しことばは、さまざまな要素の混じったもので、それらを使ってもものを書くためには、いくつかの整理が必要になる。たとえば、論理的にものごとを書いていくために使う接続詞は共通語でも多くが文語からの借用語であったりする。「しかし、しかるに、また、ひるがえって、また」などは、書きことばの用語であり、話しことばで書き記すときは違和感を覚えるであろう。これらを共通語から借用するか、方言形から採用するかはそれほどやさしいものではない。「である体」、「だ体」、「ですます体」などの区別も丁寧語体系がない方言では難しい。

共通語による書きことばは、特定の読み手を想定せずとも文章を書くことが可能である。これに対し、話しことばとしてしか存在してこなかった方言では、聞き手を想定せずにももの

---

<sup>10</sup> 長音表記は「う」「ー」が混在している。

を書くのは難しい。特定の相手を持つ手紙やメールは書けても、書類であるとか、教科書の記述が難しいということは十分ある。自分の母方言の運用能力を保持しているなら、その母方言で論文を書くというような設定で文章を書いてみるとよくわかる。書きことばは長い年月をかけて練られた構築物であるため、口語でしか存在していなかった方言を書きことばにするにはさまざまな工夫が必要となる。

田窪（2011）では、西原地区の保育園園長花城千枝子氏の創作絵本作成の際のエピソードを用いて書きことば作成の苦労話が簡単に触れられている。この場合は子供向けの読み聞かせ絵本であったため、花城氏の共通語や宮古島の威信言語である平良方言の影響を排除するだけで、物語として成立させることが可能であった。しかし、もっと別の分野で書きことばを成立させるためには乗り越えるべきさまざまな問題があることが想像される。

## 5. 終わりに

以上、西原地区で話されている池間方言を例に、話しことばとして存在する言語を書けるようにすることの難しさを見てきた。アイヌ語や琉球の諸言語、諸方言の危機度が注目を集めているが、実は共通語を除いてすべての方言が危機言語になりかけているとみなしてもよい。東京の諸方言であっても、共通語と異なる部分は非標準形として軽視される可能性があるし、関西方言でさえも、何十年かの間にある種標準化された形式に収斂し、実際の方言形としては存在基盤が怪しくなっている。また、関西方言そのものの使用を制限しようとする言説が存在し、非関西地区での関西方言の使用を好ましく思わない人が直接、間接にその使用を非難する。ましてや他の方言の使用は、母語話者本人が使用を自粛する方向に進み、母語話者同士でも共通語で話すことが増えているのではないだろうか。現在、地域の多様性を守ろうという運動がある一方で、方言や方言に代表される地域性を疎んじ、非標準的で劣ったものと排除する動きも依然として存在する。話ことばとしてしか存在しない言語やその方言を正確に、安定して書けるようにすることは地域の多様性を維持し継続するための一つの手段として有効であると思われる。

（たくぼ・ゆきのり 国立国語研究所 所長）

## 参照文献

- 伊計文雄/上里武/吉浜朝栄/本村満（2005）『島に生きて』 私家版  
上里武/本村満/吉浜朝栄（2008）『池間島のミャークヅツ』 私家版  
小川晋史[編]（2015）『琉球のことばの書き方』 くろしお出版  
創立百周年記念期成会民謡保存部（1975）『西原民謡集』 私家版  
田窪行則（2011a）「宮古池間方言の調査について」『日本語学』 35-6, pp. 24-33.  
田窪行則（2011b）「危機言語ドキュメンテーションの方法としての電子博物館作成の試みー

- 宮古島西原地区を中心としてー」『日本語の研究』7-4, pp.119-134.
- 田窪行則[編] (2013) 『琉球列島の言語と文化』 くろしお出版
- 花城千枝子 (2013a) 「みまむいぶすぬ はなす」 田窪[編] (2013) 『琉球列島の言語と文化』 pp. 325-342
- 花城千枝子 (2013b) 「っふあ そうだてい じゃんぬ はなす」 田窪[編] (2013) 『琉球列島の言語と文化』 pp. 343-359.
- 林由華 (2013) 「琉球語宮古池間方言の談話資料」田窪[編] (2013) 『琉球列島の言語と文化』 pp. 197-257.
- Takubo, Yukinori (2018) Mutual Intelligibility as a measure of linguistic distance and intergenerational transmission. Keynote talk given at NINJAL International Symposium: Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization, August 8th 2018.
- Yamada, Masahiro et al. (2020) Experimental Study of Inter-Language and Inter-Generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages. *Japanese/Korean Linguistics vol. 26*. Stanford: CSLI publications. 249-260.